



ピアソン・カレッジにて  
(1987年。前列左が筆者)

岡の関連基幹病院にて忙しく働いた。徹夜で手術することはあっても休日などなく、頭頸部外科を中心に頭蓋底外科・形成外科の手術助手、学会発表の準備と非常に充実した日々を過ごした。医師になって五年目には、基礎的研究の経験がなく、学問的視野・考察力が足りないことに不均衡を感じ、進路を変更し大学院へ進み研究主体の学生生活を送る選択をした。

臨床では教科書を読むか学会発表の準備をする時以外、英語を必要とする機会に乏

しいが、研究では実験プロトコルの理解はもちろん、いかに早く最新の情報へアプローチし仮説を組み立て、これを証明するかがポイントとなる。留学生との情報交換も必要になり、この点UWCでの経験、英語力が生かされた。院生活四年のうち、先の二年間は難聴遺伝子の解析を手伝い、後半二年間はES細胞や羊膜細胞といった幹細胞を培養評価し、モルモットの蝸牛へ移植する実験を行った。共焦点顕微鏡にて生着が推測された幼弱な細胞は難聴治療の一助となりうる可能性が示唆され、学位論文として報告した。今思えば困難な状況の下で拙い結果がTransplantation誌に掲載され、また日本再生医療学会総会にてシンポジストを務めることができたのも、カナダで培った苦い経験が礎になり作用したのだろうと感謝している。余談であるが、研究室の別グループはスペースシャトル搭載の宇宙実験に採択された研究を行っていた。しかし残念ながら先の空中爆発にて実験マウスは帰還せず雲上の塵と化し計画が頓挫した。近くで見ていた私はさまざま因子に影響を受けざるをえない研究世界の厳しさを痛感した。

臨床面でも留学経験が確かに有用であった機会があった。耳鼻科では世界的に有名なHouse Ear Instituteの手術解剖実習に

二年前参加した。よく検討された授業の半分は講義とディスカッションであったが、手術室とつながったスクリーン上の術者にいろいろと質問し、Clinical Fellowとメンター病の治療法の米国内外の違いや施行中のstudyについて意見交換するなど、実習を十二分に満喫することができたのはすべてUWCで鍛えられたお陰であろう。

## 国際的な仕事を

さて、院卒業後私は小休止を経て、現在の病院に勤務させて頂いている。外来診療・手術と充実した日々であるが、ちょうど先日チリの文部省で働いているUWC時代の友人から、九月に出張で来日するとのメールをもらった。非常に懐かし嬉しかったが、これら友人は卒業後World Economic ForumやWorld Bank等の国際機関に勤めたり、研究者・コンサルタントになったりとそれぞれ活躍している。思い返すと、私は日本語面接時にUWCへの応募理由を尋ねられWHOで働きたいからと答えていた。現在ベクトルが多少ずれており心苦しいが、国際的な仕事ができればとの希望は常にある。いつの日か何らかの形でそのような機関に関わることができ、ご支援いただいたUWC日本協会関係企業各社にご恩返しできればと努力を続けている。

# 医学研修とUWC体験

一九八七年「UWC」留学。一九九六年信州大学医学部卒、慶應義塾大学医学部耳鼻咽喉科入局、二〇〇四年信州大学大学院医学研究科卒。同年七月より現職。日本耳鼻咽喉科学会認定専門医。医学博士。

私はカナダにあるピアソン・カレッジで二年間、七三カ国から来た約二〇〇人の奨学生と共に生活する機会を与えられた。異なる背景、宗教、習慣を持つ友人たちと遊び、悩み、刺激を受け過ごした日々をこの機会によく振り返ると、さまざまな意味で処理し難い課題を与えられ続けた二年間だったと言える。帰国後一五年経た今でも時折、当時感じたままの疑問にはっと気付き、喜び・悲しみが思い出され驚く。あの頃私が見た貴重な体験は明らかに芽吹いて成長し、今の私を支えてくれている。

## 「よく頑張った」

カナダに渡った当初、アナウンスがわからず夕食を逸したことから始まり、宿題となった辞典ほどの教科書のウイルスに関する

## 弓削 勇



慶應義塾大学医学部耳鼻咽喉科助手

る章を読むのに数日かかってしまうなど、持ち込んだ大きな希望とは裏腹に大変な時期を過ごすことになった。授業中、ラボの水槽の中のカニを見せられ Phylum Arthropoda(節足動物門)と言われても理解もできなければ質問もできず、一体自分は何なのかとストレスを感じる機会が度々であった。しかし二年目ともなると、ブタ胎児の解剖から心電図の実験まで、いつの間にか実験内容を確認し、教科書の文節を適当に引用しつつワープロでレポートを書くことができるようになっていた。生物の授業は実験中心で、まとめでは一つのトピックに対して多面的な論点があることを教えてくれた。問題に対してアプローチはいくらでもあった。帰国も近づいたある夜、突然生物教師の家に呼ばれ、「よく

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名以上の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三八八名の卒業生を輩出している。

頑張った。私は日本に行つて二年間では君みたいにできないよ」とほめられたことを今でも嬉しく思い出す。

私は元々医学部志望であった。折から高校留學生が増加し、入試規定が変更され、帰国後一般受験をすることになった。学生生活は信州の大自然の中で過ごしたが、日本の大学に入つても当然のようにUWCの友人との交流は続いた。UWCの寮で隣室だったドイツ人がアイルランドで洞窟探検中に亡くなった時には、他のドイツ人、カナダ人の同級生二名と暫くして時間を合わせてお墓参りにベルヒテスガーデンまで行った。彼の母親は麻酔科医であったので、お願いして手術見学までさせてもらった。学生時代は英語もできるようにしていたので、米軍基地病院へ見学に行き、米医師国家試験のための勉強もした。

## 臨床から研究へ

卒業後、耳鼻咽喉科に入局し優秀な上司・同僚に刺激され四年間都内や栃木・静